

## 大学入試と教育

小嶋祥三

2016年度入試から東大では推薦入試、京大では特色入試を行うという。入試の成績が受験生のすべての能力を反映するわけではないので、いろいろな試みをするのは悪いことではない。高校での活動実績に科学オリンピック出場などの項目があり、新しい入試で配慮されるようだが、入試のために高校生がそちらに精を出すようだと、本末転倒になってしまうかもしれない。いずれにせよ、大学での成績やその後の社会での活動の追跡調査は絶対に必要だ。ちなみに、わたしが在職した慶應義塾大学文学部の入学後の調査では、推薦入試の学生の成績が最も良かった。

ここ数年のノーベル賞の受賞者をみると東大、京大の学部出身者は多くないようだ。では、ノーベル賞受賞の先生方を推薦、特色入試ですくいあげることができたのだろうか。スポーツなどをやっていて、勉強一筋ではなかったようだ。成績、活動実績のハードルを越えるのは難しかったかもしれない。大学や大学院、さらにはその先で能力を開花させたのだろう。そうであるならば、重要なのは一般入試ではいつてきた学生に対する入学後の教育ということになる。

この点に関して、プロ野球のスワローズやライオンズの監督として弱小球団を優勝させた広岡達朗の話が参考になる。広岡がカープの内野守備コーチの時、苑田聡彦という外野手を内野手にコンバートする要請があった。広岡は苑田に内野のセンスがないと反対したが、上からの要請は強く、仕方なく引き受けた。苑田は上達せず大いに苦しんだが、ある時から急に動きがよくなり、内野手として活躍したという。この経験から広岡が得た教訓は「プロに来る選手は誰でも大変な才能をもっている。しかし答えの出し方を知らないから自分に才能がないと思ってしまう。その答えを泥まみれになって選手と一緒にさがしてやるのが指導者の務め。選手と指導者にやる気さえあれば、選手は必ず答えを見つけ上達してくれる」というものだった。

あるレベル以上の大学の学部、大学院に来る学生、院生はそれなりの能力を持っているだろう。その能力に関して、本人も教育する方も分かっていないことが多い。学生、院生の興味を教員も一緒になって追求することが、学生や院生の才能を開花させることになるだろう。無論、教員には自分の研究テーマがある。ただ、自分のテーマを学生や院生に分担させるだけでは、かれらは大きく育たないかもしれない。学生、院生がそこから学ぶことはあるだろうけれど。教員にはどのような学生、院生のテーマも、自分の研究、興味の体系の中に組み込むことができる懐の広さが必要だ。そうでないと、学生らが持つテーマを面白いと感じられず、一緒に追及しようとは思わず、学生の興味を潰しにかかるだろうから。仮に、竹にプラスチックを接ぐようなテーマでも、頭ごなしに否定することはせず、少なくとも、一緒になって考えてやる必要がある。それが大きく発展することもあるのだから。